

父娘関係と基本的信頼感の関連性

問題

近年、母親と娘が名前呼び合う、一緒に遊びに行くなど、親子関係の変容が見られるようになった。母子関係がより親密化したことで、そこに注目する人も増えた。実際、卒業論文や母子関係についての文献を調べてみても数多くみられた。

一方、父親と娘の関係においては、母親と娘の関係に比べると研究例は少なく、論文や文献も限られていた。しかし、子育ては父親と母親の両方が関与するものである。では、父親の存在は子供の発達にどのように影響するのであろうか。さらに、娘に関しては、思春期を迎えても父親と仲がよい人と、思春期を境に父親との仲が疎遠になった人との違いが発生する。これは何の違いなのであろうか。注目すべき点はいくつかあるが、それに関する研究例が少なかったことから、世間の注目度・関心が低いように思われた。

そこで、今回は父親と娘の関係に重点を置き、父親と娘の関係が人によって異なるのは、どのような要因が関係しているのかという研究テーマに至った。

馬場(1984)によると、娘の女らしさの発達には母親よりむしろ父親のほうが重要な役割を果たすとし、宗内(1989)は、女子は父親(男)の立場から自分(女)を見ることによって女性役割を学ぶと指摘している。

女子の性行動の進行と家庭環境との関連は以前から指摘されている(間宮, 1976, 伊藤, 1985, 内山, 1988)。そして、女子の性非行は、親子関係の愛情不足を代償する行為であると言われているが(内山, 1986, 松本, 1986, 松本, 1988, 清水, 1988, 小野, 1990, 下山, 1996)、女子の非行、特に性非行については父親との関係を指摘するものが多い。例えば、宗内(1989)は、家庭裁判所での非行臨床体験から、女子非行ではそのほとんどにネガティブな父子関係が見られ、父子関係は良ければ、母子関係が悪くても非行は防げるが、父子関係が悪ければ、母子関係が良くても非行を防ぐのは容易ではないと述べている。

このように、女子・女性にとって父親の愛情は、自己の存在を支える基盤になると考えられる。伊藤(1988)の事例では、このような非行少女たちから「何をやっても満ち足りた感じがしない」などの言葉が発せられることが多いという。非行少女たちは、自己の存在を支えるはずの父親の愛情を感じられず、自己に対する評価(Self-Esteem)も低くなっていると考えられる。また、父娘関係は女子・女性の自我同一性、女性らしさ、男性性と言われてきた積極的な態度、Self-Esteem などの人格形成に対し、重要な役割を果たすと思われる。

また、中島ら(1992)は男女非行少年の研究から、女子では男子より父親から援助を受けているという感覚が希薄であることを報告し、辻井ら(1992)は、非行男女少年群と健常群(中・

高校生)の比較調査から、女子非行群は健常群よりも両親の放任の度合いが低く、侵入的で不安定なものであることを指摘している。また、神谷ら(1995)の研究では、女子青年において父娘関係が陰悪であるほど、娘は父親を頑固だと考えている。

これらのことから、娘にとって父親がマイナスになる場合として、娘にとってその存在感がない場合と、逆に過干渉である場合や頑固である場合が考えられる。つまり、娘にとってあまりにも「存在感のない」父親や、逆に娘に対し「侵入的・過干渉」であるような父親や、あるいは娘の意見を受け入れなかったり、子どものように自分の意見を通そうとする「頑固」な父親は、娘にとってプラスの影響を及ぼさないと考えられる。

女子にとって、父親の「愛情」という側面は娘にとってその存在を支える重要なものであり、逆に父親の「侵入的・統制・心理的圧迫・頑固」などは娘にとって自身の存在を不安に感じさせるものと考えられる。そして例え父の心の中では娘への愛情があったとしても、現実的に厳しい・恐い父親の態度からは、娘が「父親から娘への」愛情を感じることは困難なのかもしれない。そして娘はその父親の「厳しさ・恐さ」を、「受け入れがたいもの」、あるいは自分が「父親から受け入れられてない、信頼されていないため」とであると感じるのではないだろうか。

目的

今回の研究では、女子大生がもつ「父親のイメージ」、「幼少期の父親との関わり」、「現在の父親との関わり」についての尺度を新たに作成し、それに基づいて父娘の関係の良好性がどう変化するかを考察することを目的とする。

仮説

青年期の女子は父親に対し、基本的信頼感が高ければ、肯定的なイメージをもつと同時に父親との関係が良好であり、また、基本的信頼感が低ければ、否定的なイメージをもつと同時に父親との関係が陰悪であると考ええる。

方法

調査対象者 S大学の女子大生 83名を対象に質問紙調査を行った。有効回答数は79名であった。また、欠損値があるものは4名分であった。回収したデータのうち、欠損値のあるデータは分析から除外した。

調査日時 2010年6月1日および6月3日の講義時間内に行った。

調査の手続き 主に臨床家が父娘関係について書いた文献5冊(fishel,1985、菅,1996)から父娘関係に重要と思われる事柄を収集した。娘が持つ父親のイメージや幼少期の関わ

り方により父娘関係は変化すると考え、そこに現在の父親との関わり方も加え、幼少期の関わり方・現在の関わり方・父親の人物像のこれら 3 つを下位尺度とした。この段階で、「幼少期の関わり方」15 項目、「現在の関わり方」14 項目、「父親の人物像」10 項目、計 39 項目の「父娘関係尺度」を作成した。各項目に対し、1＝「あてはまらない」、2＝「ややあてはまらない」、3＝「どちらでもない」、4＝「ややあてはまる」、5＝「あてはまる」の 5 段階評価で回答を行ってもらうものとする。また、★印を逆転項目とする。(付表 1)

「父娘関係尺度」とあわせて、親子間の基本的信頼感に関する尺度を使用した。これは、酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村(2002)によって開発された、親子間の信頼感を測定するための、親子間の信頼感に関する尺度であり、その中から父親との信頼に関する質問を抜粋し用いた。本来の尺度は父親と母親の両方の信頼感を測るものであったが、今回は、父親との信頼感のみで計ったこととみなす。(付表 2)

結果

1. 父娘関係尺度の分析

まず、父娘関係尺度 39 項目の平均値、標準偏差を算出した。項目分析を行い、天井効果のみられた項目は、「父親と休日と一緒に出かけていた」、「現在、父親とよくけんかをする(逆転項目)」、「父親は信頼できる人である」、「現在、父親と洗濯物は別で洗ってほしいと思う(逆転項目)」、「父親は自分の経験や考え方を話してくれた」、「父親の誕生日を家族で祝ったことがある」、「父親は学校行事(運動会や授業参観)に参加していた」、「父親と一緒に遊んだ記憶がない(逆転項目)」、「現在、父親とはできるだけ距離を置きたいと思う(逆転項目)」、「父親と手をつないだことがある」、「父親は尊敬できる人である」、「父親と朝食や夕食を一緒に食べていた」の 12 項目であった。フロア効果のみられた項目は、「父親と中学生まで一緒にお風呂に入っていた」、「現在、父親と恋愛話ができる」の 2 項目であった。天井効果が多くの項目でみられ、本来ならば天井効果・フロア効果がみられた項目を除外するが、これらの項目を除外すると以降の分析が困難だと判断し、これらの項目を除外せずに以降の分析を行った。

次に、この 39 項目に対して、主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その際、因子数を 3 と指定して行った。固有値は 14.47、3.65、2.34、1.79、1.65…というふうに、3 因子構造が妥当であると思われる結果となった。また、0.35 以上を基準とし、それを下回る項目である「父親と小学生まで一緒にお風呂に入っていた」、「父親に勉強を教えてもらったことがある」、「現在、父親と洗濯物は別で洗ってほしいと思う」の 3 項目については因子に影響を与える大きさが少ないため、因子負荷量が十分でない項目として判断されたが、これらを除外せず再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。5 回の反復で回転が収束し、Promax 回転後の最終的な因子パターンを Table1 に示す。

		因子		
Table1 父娘関係尺度の因子分析結果				
項目内容	I	II	III	
現在、自分は父親と仲が良い	0.93	-0.12	0.15	
父親は信頼できる人である	0.88	-0.04	0.08	
父親は尊敬できる人である	0.87	0.01	-0.02	
現在、父親は自分の悩みを親身になって聴いてくれる	0.81	-0.04	-0.15	
父親は頼もしい人である	0.78	0.11	-0.07	
現在、父親は自分のことを気にかけてくれていると感じる	0.77	0.07	0.01	
父親から社会の厳しさやモラル・マナーなどを教わった	0.74	0.07	-0.44	
現在、父親は自分のことを理解してくれていると思う	0.74	0.04	0.19	
父親は自分の経験や考え方を話してくれた	0.69	0.09	-0.30	
*現在、父親とはできるだけ距離を置きたいと思う	0.67	0.03	0.25	
現在、父親は自分が兄弟又は母親と喧嘩したときに自分の味方になってくれる	0.65	-0.03	0.22	
現在、父親と2人で出かける機会がある	0.64	0.01	-0.17	
父親は明るい人である	0.58	0.15	-0.06	
父親は社交的な人である	0.57	-0.11	0.06	
現在、父親は旅行に連れて行ってくれる	0.57	0.12	-0.02	
現在、父親の誕生日を家族で祝う	0.51	0.23	-0.22	
現在、父親からお小遣いをもらう機会がある	0.50	0.06	0.03	
現在、父親と恋愛話ができる	0.50	-0.10	-0.06	
現在、父親と共通の趣味を持っている	0.49	-0.08	0.22	
父親と中学生まで一緒にお風呂に入っていた	0.42	-0.18	-0.10	
父親と小学生まで一緒にお風呂に入っていた	0.34	0.19	-0.04	
父親に勉強を教えてもらったことがある	0.33	0.21	-0.15	
*現在、父親と洗濯物は別で洗ってほしいと思う	0.23	-0.10	0.09	
*父親と一緒に遊んだ記憶がない	-0.08	0.91	0.01	
父親は学校行事(運動会や授業参観)に参加していた	-0.20	0.72	0.14	
父親と手をつないだことがある	-0.01	0.71	-0.06	
父親と休日に一緒に出かけていた	0.02	0.68	0.08	
*父親に保育園(幼稚園)に迎えに来てもらったことがない	-0.21	0.68	-0.04	
父親と朝食や夕食を一緒に食べていた	0.17	0.61	0.04	
*父親は仕事を優先し、家族は二の次であった	0.05	0.55	0.20	
父親は子育てに関わっていた	0.29	0.53	0.02	
父親の誕生日を家族で祝ったことがある	0.34	0.53	-0.12	
父親と1日の出来事を話した	0.33	0.36	0.09	
*父親は支配的な人である	-0.10	0.07	0.80	
*父親は短気な人である	0.05	0.05	0.75	
*父親は厳しい人である	-0.44	0.24	0.67	
*現在、父親とよく喧嘩をする	-0.15	-0.12	0.59	
父親は温和人である	0.47	0.04	0.59	
*父親は自己中心的な人である	0.47	-0.13	0.55	
* 逆転項目				

第1因子は22項目で構成されており、「現在、自分は父親と仲が良い」、「父親は信頼できる人である」、「父親は尊敬できる人である」など、父親に好感を持っている内容の項目が高い因子負荷量を示していた。そこで、「父親に対するポジティブな印象」因子と命名した。

第2因子は11項目で構成されており、「父親に保育園(幼稚園)に迎えに来てもらったことがない(逆転項目)」、「父親は学校行事(運動会や授業参観)に参加していた」、「父親と朝食や夕食を一緒に食べていた」など、父親との過去においての関わりの内容の項目が高い負荷量を示していた。これらの項目は「幼少期の父親との関わり方」尺度と想定していた項目内容とほぼ同じであるため、そのまま「幼少期の父親との関わり方」因子とした。

第3因子は6項目で構成されており、「父親は短気な人である(逆転項目)」、「父親は厳しい人である(逆転項目)」、「父親は自己中心的な人である(逆転項目)」など、実験参加者がもつ父親の人物像やイメージの内容の項目が高い負荷量を示していた。これらの項目は「父親の人物像」尺度と想定していた項目内容とほぼ同じであるため、そのまま「父親の人物像」因子とした。

2. 父娘関係尺度の総得点および下位尺度間の関連

父娘関係尺度の総得点の平均値、標準偏差を算出したところ、総得点の平均値は 3.35 (SD0.78)であった。

次に、父娘関係尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「父親に対するポジティブな印象」下位尺度得点(平均値 3.13、SD0.93)、「幼少期の父親との関わり方」下位尺度得点(平均値 3.83、SD0.87)、「父親の人物像」下位尺度得点(平均 3.29、SD1.02)、既存尺度(平均 2.45、SD0.78)とした。

内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ、「父親に対するポジティブな印象」下位尺度で $\alpha=0.94$ 、「幼少期の父親との関わり方」尺度で $\alpha=0.89$ 、「父親の人物像」で $\alpha=0.84$ 、既存尺度で $\alpha=0.92$ と十分な数値が得られた。父娘関係尺度の総得点および下位尺度間相関を Table2 に示す。

Table2 父娘関係尺度の下位尺度間の相関係数、平均、SD、 α 係数

	ポジティブ	幼少期	人物像	親子間	平均値	SD	α 係数
ポジティブ	—	.67**	.32**	.83**	3.13	0.93	0.94
幼少期	.67**	—	.42**	.64**	3.83	0.86	0.88
人物像	.32**	.42**	—	.47**	3.29	1.02	0.84
親子間	.86**	.64**	.47**	—	2.45	0.78	0.92

** $p<.01$

また、父娘関係尺度(「父親に対するポジティブな印象」下位尺度、「幼少期の父親との関わり方」下位尺度、「父親の人物像」尺度)の総項目 39 項目の α 係数を算出したところ。 $\alpha=0.947$ であり、十分な数値が得られた。

3. 親子間の信頼感尺度に関する尺度

次に、Table2 にも示したように、親子間の信頼感に関する尺度 8 項目の平均値、標準偏差を算出したところ、2.45(SD0.78)であった。 α 係数を算出したところ $\alpha=0.92$ であった。

4. 父娘関係尺度と親子間の信頼感に関する尺度の関連

同じく Table2 にも示したように、父娘関係尺度の「父親に対するポジティブな印象」下位尺度、「幼少期の父親との関わり方」下位尺度、「父親の人物像」尺度の3つの下位尺度

と、既存尺度の親子間の信頼感に関する尺度の相関係数を算出した。その結果、「父親に対するポジティブな印象」との間では $r=.86$ 、「幼少期の父親との関わり方」との間では $r=.64$ 、「父親の人物像」との間では $r=.47$ であり、父娘関係尺度と親子間の信頼感に関する尺度に相関がみられた。特に「父親に対するポジティブな印象」尺度との間では高い数値が得られた。

考察

まず、今回作成した尺度の各項目について平均値と標準偏差を算出した結果、「幼い頃、父親と休日と一緒に出かけていた」、「父親は信頼できる人である」、「現在、父親と洗濯物は別で洗ってほしいと思う(逆転項目)」、「父親は自分の経験や考え方を話してくれた」、「父親の誕生日を家族で祝ったことがある」、「父親は学校行事(運動会や授業参観)に参加していた」、「父親と一緒に遊んだ記憶がない(逆転項目)」、「現在、父親とはできるだけ距離を置きたいと思う(逆転項目)」、「父親と手をつないだことがある」、「父親は尊敬できる人である」、「幼い頃、父親と朝食や夕食と一緒に食べていた」の11項目で天井効果がみられた。「父親の誕生日を家族で祝ったことがある」、「父親は学校行事(運動会や授業参観)に参観していた」、「父親と手をつないだことがある」、「幼い頃、父親と朝食や夕食と一緒に食べていた」という項目は、調査対象者の父親が、想定していたよりも子育てに深く関わっていた為、天井効果がみられたと考えられる。「現在、父親と洗濯物は別で洗ってほしいと思う」という項目は、質問内容が父親を拒絶するような極端なものであったため、天井効果に繋がったのではないかと考えられる。

次に因子分析の結果、3因子構造がみられ、それぞれ、「父親に対するポジティブな印象」、「幼少期の父親との関わり方」、「父親の人物像」と命名した。「幼少期の父親との関わり方」因子については、あらかじめ想定していた下位尺度が支持されたと言えるだろう。「父親の人物像」因子については、一部の父親に対する肯定的な印象が、新しい因子に加わっていたため、あらかじめ想定していた下位尺度が支持されたとは言えなかった。また、想定していなかった新しい因子は「父親に対するポジティブな印象」因子であり、これらの項目は父親に対するポジティブな印象と現在の関わりが良好であるかを測るために必要な因子であると考えられる。

また、Table2より3因子それぞれの相関係数は、「父親のポジティブな印象」と「幼少期の父親との関わり方」が0.67、「父親のポジティブな印象」と「父親の人物像」が0.32、「幼少期の父親との関わり方」と「父親の人物像」が0.42であることから、どの因子も相関が高く関連性があると考えられる。特に「父親のポジティブな印象」と「幼少期の父親との関わり方」は強い相関が見られ、「幼少期の関わり方」、父親に対するポジティブな印象を形成する、大きな要因であると示唆される。また、どの因子の相関も高かったことから、

3 因子に分けず 1 因子としてもみられるのではないかと考え、総得点の記述的統計量と α 係数を算出したところ、記述的統計量の平均値が、3.35、SD が 0.78 であった。また α 係数が 0.95 であった。したがって、これらは 1 因子ともみられることが分かった。このことから、今回作成した尺度には一元性があり、父娘関係の良好性を計る上でまとまりがあったといえる。

また、既存尺度と照らし合わせた結果、3 因子とも相関が非常に高く出たため、これらの因子は既存尺度である親子間の信頼を形成するのに、関係のある要因であると考えられる。

したがって、仮説の基本的信頼感が高ければ肯定的なイメージを持つという点は支持された。しかし、今回の調査協力者が全体的に父親と良好な関係であったため、基本的信頼感が低いと否定的なイメージを持つという仮説は支持されたかどうかは分からなかった。

総合討論

今回の研究では、新たな尺度項目である「父娘関係尺度」の作成において、父娘関係について書かれた文献から重要と思われる事柄を収集し、基本的信頼感尺度は酒井ら (2002) によって開発された親子間の信頼感に関する尺度を用いることとした。これらの尺度に基づき、基本的信頼感および父親に対する対人的信頼感が形成されている場合、青年期の女子は父親との関係が良好であるという仮説を立て、父娘関係の良好性がどのように変化するか考察することを目的とした。その結果、3 因子ともに非常に高い相関がみられ、仮説の基本的信頼感が高いと肯定的なイメージを持つという部分は支持された。しかし、今回の調査では父親と良好な関係であるという調査協力者が多く、基本的信頼感が低いと否定的なイメージを持つという仮説は支持されたかどうか分からない形で終わった。

感想

質問紙調査実施の際にいくつかの反省点が生じた。まず、「父親がいないため、回答できない。」「(一人暮らしなどで) 父親としばらく会っていないがどうすればよいか。」「これは家族とやったことも含むのか、父親だけなのか。」という調査協力者の質問・意見への対応についての問題である。これらは教示・配慮不足及び曖昧な質問が原因であり、対処例として「父親がいない方は〇番 (別の質問) に進んでください、無理にお答えいただかなくて結構です」「最も新しい記憶で答えてください。」「今回は (原則として) 父親との関係限定で考えてください。」などの具体的な教示を補足する必要があったと考えられる。さらに、本研究では、親子間の信頼感に関する既存尺度の中から父親に該当するもののみを使用したため、相関係数が高く算出された。ただし、この結果は意図的な操作が加わっているため、より正確な結果を得るためには調査協力者に父親と母親について質問し、両者の

差から父親の重要さを吟味すべきであったと考えられる。尚、グループ作業全体に関しては、班の中で執筆、分析を分担して各自作業を行った結果、最終執筆の段階で班の中で混乱が生じ、把握データに食い違いがあったため、より積極的に集まる時間を設け、データを持ち寄って話し合う必要があった。

幼少期の父親との関わり方

- 1 父親と休日に一緒に出かけていた
- 2 父親は学校行事(運動会や授業参観)に参加していた
- 3 父親と朝食や夕食を一緒に食べていた
- 4 父親と小学生まで一緒にお風呂に入っていた
- 5 父親と中学生まで一緒にお風呂に入っていた
- 6 ★父親と一緒に遊んだ記憶がない
- 7 父親の誕生日を家族で祝ったことがある
- 8 ★父親は仕事を優先し、家族は二の次であった
- 9 ★父親に保育園(幼稚園)に迎えに来てもらったことがない
- 10 父親に勉強を教えてもらったことがある
- 11 父親と1日の出来事を話した
- 12 父親と手をつないだことがある
- 13 父親は子育てに関わっていた
- 14 父親は自分の経験や考え方を話してくれた
- 15 父親から社会の厳しさやモラル・マナーなどを教わった

現在の父親との関わり方

- 1 現在、父親と2人で出かける機会がある
- 2 現在、父親と共通の趣味を持っている
- 3 現在、父親は自分の悩みを親身になって聴いてくれる
- 4 現在、父親は自分が兄弟又は母親と喧嘩したときに自分の味方になってくれる
- 5 現在、父親の誕生日を家族で祝う
- 6 現在、自分は父親と仲が良い
- 7 ★現在、父親とよく喧嘩をする
- 8 現在、父親は自分のことを理解してくれていると思う
- 9 ★現在、父親とはできるだけ距離を置きたいと思う
- 10★現在、父親と洗濯物は別で洗ってほしいと思う
- 11 現在、父親からお小遣いをもらう機会がある
- 12 現在、父親と恋愛話ができる
- 13 現在、父親は旅行に連れて行ってくれる
- 14 現在、父親は自分のことを気にかけてくれていると感じる

父親の人物像

- 1 ★父親は支配的な人である
- 2 父親は温和な人である
- 3 ★父親は厳しい人である
- 4 父親は明るい人である
- 5 ★父親は短気な人である
- 6 父親は頼もしい人である
- 7 父親は信頼できる人である
- 8 父親は尊敬できる人である
- 9 ★父親は自己中心的な人である
- 10 父親は社交的な人である

付表 2 親子間の信頼感に関する尺度質問紙

父親は自分のことが一番好きだと思う
父親は私を一番信頼していると思う
父親は私と一緒にいて幸せだと思う
父親は私に何でも話してくれる
父親を誰よりも信頼できる
私は父親と一緒にいて幸せだ
私は父親が好きだ
私は父親には何でも話せる

引用文献

- 伊藤富士江 (1985) 「売春を経験した少女たち」について 青年問題 35(6), 4-12
内山絢子 (1986) 性非行 児童心理 40(15), 70-71

- 内山絢子（1988）性的経験と社会環境 青少年問題 35(11), 38-43
- 小野修（1990）見えない非行の芽 児童心理 44(10), 66-71
- 春日由美 日本における父娘関係研究の展望：娘にとっての父親 九州大学心理学研究 1, 157-171, 2000-03-10
- 酒井厚（2001）青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, 9, 59-70.
- 酒井厚（2005）対人信頼感の発達—児童期から青年期へ— 川島書店
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則(2002). 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 清水弘司（1988）対人関係から見たサイコセクシャルな関係 犯罪心理学研究 25(特別号), 265-272
- 下山晴彦（1996）青年期の愛と性 現代のエスプリ—親密さの心理—, 52-59
- 馬場謙一 父とは何か—精神分析から見た父親— 馬場謙一他編 父親の深層, 有斐閣, 1-32
- 松本良枝（1986）性非行 児童心理 40(12), 160-161
- 松本良枝（1988）青少年の諸問題と親子関係 国谷誠朗編 講座家族心理学 3（親と子—その発達と病理—）金子書房, 197-215
- 間宮武（1976）わが国青年（学生・生徒）における性行動の性差にする調査(その 1)・(その 2) 横浜国立大学教育学部紀要 16, 24-48
- 眞榮城和美（2005）自己評価に関する発達心理学研究—児童期から青年期までの検討—風間書房
- 宗内敦（1989）子供にとっての父親 児童心理 43(12), 78-80